

<第 110 回目ひとり起業塾>

今回は、“草むしり”で起業した宮本成人さんのお話です。44歳で独立するまで、飲食業で店長を勤める等、転職経験は8回。30代後半には、引きこもり、うつ病も経験しました。「好きな仕事をして生きたい」、そう思った矢先に誘われた、草むしりのアルバイト。いい汗を流す清々しさ、きれいになった庭を見て喜ぶお客様の笑顔に、「これだ！」と天職を見付けました。

「44歳で『草むしり』を生業に。生涯現役、60～70代のスタッフと共に汗を流す」

44歳の時、「草むしり」で起業。人生は山あり谷あり、転職8回目に天職をつかむ

群馬県前橋市で“草むしり”を生業とする、その名も、株式会社草むしりの宮本成人さん。44歳で起業するまで転職8回。「草むしりのアルバイトをしてみないか？」と誘われたのをきっかけに、「太陽の下でカラダを使って汗を流し、『探していた仕事は、これだ！』と実感しました」。草むしりや植木の剪定等、庭の手入れを仕事とし、雨の日も風の日も、7時半の始業から日が暮れるまで働く。同社で働く従業員は62歳から78歳までの7名、剪定業、建具職人等、さまざまな経験を活かしている。「やる気があれば、年齢は関係ありません。始業は7時30分なのですが、皆さんはいつも6時前に出社。時間を気にして働くのではなく、自分がやりたいから来てくれる。人の役に立つことが“生きがい”なのかもしれません」。定年が60歳とか65歳とか言われる昨今、70代になっても元気に働く姿には憧れる。宮本さんも「生涯現役、85歳まで働きたい」と刺激を受ける毎日だ。開業から6年が経ち、「商品は、僕たち自身」と断言。「プロなので、庭をきれいにするのは当たり前。また、値段でお客様に選んでいただくつもりもないので、価格の安さは売りにしていません。『任せておけば安心』と思っていただけることを仕事の価値としたい。」

宮本さんは1965年、長野市に生まれた。高校で山岳部、大学で日本拳法部に所属、4年次には日本拳法で全国チャンピオンになった。「“憲法”部だと思って門をくぐったら、そこは“拳法”部(笑)。怖い先輩方に囲まれ、入部の判を押すしかなくて。体重が筋肉で10キロも増えるほど、先輩方にしごかれました」。卒業後は地元の企業に就職するが、「個性を發揮できず、馴染めない」と2年で退職。その後、カナダで日本拳法協会の海外指導員として2年間働いた。帰国後、地元長野へのオリンピック誘致に携わる。26歳の時、ケンタッキー・フライド・チキンのフランチャイズ店で働き始め、飲食業にやりがいを感じて「定年まで勤め上げよう」と決心。それから11年間、店長になった店は売上日本一を達成した。「当時は若かったので、『自分の力で、良い成績を出せた。会社に勤めていなくても自分の力でやっていける』と思い、独立することにしました」。貯金を叩いて飲食フランチャイズの加盟金を支払い、「やる気満々で、3月に会社を辞め、4月に準備、5月には開店するつもりでした」。ところが、不動産屋を巡っても、物件が全然見つからない。「実績や肩書きが何もなかったのに、不動産屋さんが誰も相手にしてくれず、紹介してくれる物件はイマイチな所ばかり。気付けば、ゴールデンウィークを迎え、自分でも焦り、家族も『大丈夫なのか?』と。ある時、『もう出来ない』と

ギブアップ。それは、人生初めての大きな挫折でした」。その時、37歳。「それまでは、努力すれば何でも自分の思うように出来たので、独立を決意した時も、上手くいくと信じ込んでいました。ところが初めて、自分で自分を諦めたんですね。それまで37年間積み上げてきた実績や経験が全部パーになって、無職になりました」。そして、実家に引きこもってしまうのだ。そこから宮本さんが立ち上がるまで、しばらく時間が必要だった。

37歳、実家に引きこもり、うつ病に。再起してもう一度、飲食店の店長になる

37歳で、実家に引きこもった宮本さん。「過呼吸になるし、家の外に出ることも億劫になっちゃって。人の顔を見るのが怖いんですよ、今で言う“引きこもり”状態。37～38歳といえば、周りは仕事に行っているじゃないですか。でも、自分は家の中で閉じこもったまま、何もやることもなく、会社を辞めたことを後悔するばかりで……」。約半年間、引きこもる日々が続いた後、徐々にハローワークに通えるようになり、飲食チェーンの求人に応募。そして店長経験を買われ、新店長として約1年間働いた。次に別の店を任されることになり、群馬県高崎市に引越した。「朝から晩まで長時間、必死に働きました。社長からは『近い将来、独立して店をやってみないか』とまで言われていました」。43歳で退職し、次に勤めた会社は35日間で辞めた。「しょっちゅう会社を辞めていたので、『イヤになると辞める』クセが付いていましたね」。その帰りに立ち寄った公園で芝生に寝転び、「青空を見ながら大の字になると、スゲー気持ち良くて。その時ですね、『好きな仕事を、自分で始めよう』と決心したのは」。友人から「草むしりのアルバイトをしないか」という電話がかかってきたのは、そんな時だった。

44歳で「草むしり.com」を独立開業。「外でカラダを動かして働くって、気持ちがいい」

忘れもしない43歳、2008年11月、気持ちを新たにアルバイト先へ出掛けた。仕事は、個人宅の草むしりや剪定。「今まで屋内の仕事が多かったので、外で働くだけでもすごく気持ちがよかった。ちょうど秋で紅葉もきれいで、カラダを使って、いい汗を流しました。お客様が、きれいになったお庭を見て喜び、お茶まで出してくれて帰りに報酬をくださる、こんなにもいい仕事はないと思いました」。そして、草むしりを生業にすることを決めた。2009年、ひとり起業で「草むしり.com」を立ち上げた。「最初は、周囲に『こんなことが仕事になるのか?』とあざ笑われ、僕自身も『草むしりの仕事はあるだろうか』と半信半疑だったのですが、いざ始めてみると、すごく需要がありました」。初めて草むしりの依頼が舞い込んだ時、まだ道具もトラックもなかった。庭の手入れに伺った後日届いたアンケートには、「二度と利用したくない」と。大きなショックを受けた宮本さんは、机の前にそのアンケートを貼り、「これを笑い話に出来るくらいに頑張ろう」と奮起。「実家が農家だったので、小さい頃から草むしりには慣れていましたが、実はとても奥が深かった。やはり上手く草むしりをするには、それなりの技術がいりました」。その頃に入社した20歳以上年上の竹内義男さんと現場で作業を積み重ね、独自のノウハウを確立していった。

「チラシ 50 枚で一件受注」の法則に気づき、明るい未来が見えた瞬間

開業当初に苦労したのは、顧客開拓だ。最初は何をしてよいか分からず、自宅のプリンターでチラシを印刷。脚が腫れるくらい歩いて個人宅にチラシをポスティングし続けると、ポツポツと依頼の電話が入り始めた。そんなある日、配布したチラシの枚数と依頼数をパソコンで分析していると、「50枚チラシを配ると、一件受注」という法則を見付けた。それまでモチベーションが保てず、20~30枚しか配らない日も多かったが、「とにかくチラシを多く配ればいい」とそれまでの不安が吹き飛んだ。その一年後、目標とする年数百件の受注を獲得した。

草むしりは、地域密着型の仕事である。対象エリアは当初、群馬県前橋市の南部 3,000 世帯だったが、現在は「前橋インターを中心に、半径 5 キロ」に広がっている。「最初は、30~40 代のお客さまもいらっしゃると想像しましたが、統計を取ってみると、お客さまの 9 割が高齢者、特に 70~80 代の一人暮らしのおじいちゃん、おばあちゃん。『若い頃は庭いじりが好きだったけれど、足腰が弱って庭をきれいに出来なくなったので、誰かに手伝って欲しい』というお客さまがとても多いです」

日本草むしりマイスター協会を設立。全国から「草むしりマイスター」の研修に訪れる

開業 3 年目に雑誌や新聞等のメディアに掲載されると、仕事依頼の電話が増えると共に、「興味がある」、「体験させて欲しい」という問い合わせもあった。そこで、日本草むしりマイスター協会を設立し、同社の仕事を習得した人を「草むしりマイスター」と認定することにした。「最初は、半分冗談のようなつもりで協会をつくったのですが、まさか人が集まるとは思っていませんでした」。今までに群馬県内だけでなく、静岡、愛知、福井、滋賀、香川、福岡からも研修に来て、全国に草むしりマイスターが誕生、女性も 2 名いる。研修では、木や草の名前を学ぶだけでなく、現場に出てカラダで覚え込む。協会では、加盟金やロイヤリティを取らない。「僕たちはお金儲けでこの仕事を始めた訳ではありません。かつて僕が人生に迷ったように、同じような思いをしている人が全国に多くいるでしょう。その人達が再起できるきっかけを提供できればいい。研修後、自分の地元に戻って喜びを感じられる人生を送れるなら、それが僕たちの一番の幸せです」

「たかが草むしり、されど草むしり」。お客さまの「話し相手」に徹し、日常の困り事を手助けする

“草むしり”は、暑い日も寒い日も屋外で作業する過酷な仕事。群馬の夏は、体感温度が 40 度を超え、一日にアイスも 4~5 つも頬張って熱中症を防ぐほど。「僕たちは、お客さまが困っているから、働かせていただいている。自分達の体調や天候のことは言っていられず、やるしかない。この仕事は長期戦なので、年末まで日々の体調コントロールに気を付けています」。また、一人暮らしのお客さまにとって、おしゃべりをするのが楽しみのひとつなので、宮本さんは「話し相手」に徹する時間を大切にしている。また、庭仕事だけでなく、電球の取替えや家具の移動、排水の詰まり、ファックス送信等、高齢者には難しい日常の困り事を一手に引き受ける。「ありがたいことに、お客さまの約 9 割がリピーター。常連のお客さまが何を必要としているかを把握しています。去年は前橋で、百年に一度と言

われる大雪が降り、人生で初めて、屋根の上から雪下ろしをしましたよ」。定期的な情報発信として、月刊「草むしり通信」を登録顧客向けに約 600 部発行。「現場で出会った興味深い事件やモノを載せているのですが、毎回届くのを楽しみにしてくださるお客様が多く、感想を書いた葉書や年賀状をいただきます」。地域の中で、宮本さん達はとても頼りになる存在なのだ。

“つまずいた” 経験があるから、充実した「今」がある

宮本さんは天職を見つけた今、こう実感する。「これまでやってきた仕事は、すべて生きています。多くの転職経験は、“無”ではなかった。大学時代は硬派だったのですが、今では拳法部の仲間がびっくりするくらい、顔つきが丸くなったようです」。人生経験の成せるワザである。「僕の仕事は、スタッフの皆が働きやすい場を提供すること。20～30代の頃は、『俺が、俺が！』という気持ちで失敗したことも多かった。やはりスタッフがイキイキしている職場じゃないと、仕事も上手くいかないし、お客様にも喜ばれない。『俺が、俺が！』という我を捨てたのは、『どん底』を味わった 37、8歳の頃。いろいろと失敗した経験があるから、今がある。順風満帆な人生もいいけれど、大きな波があつて振れ幅のある人生も楽しいんじゃないでしょうか」。

そんな宮本さんの夢は、「草むしりマイスターとして生計を立てられる人を、日本全国に増やすこと」。「働くことに意義を見出せない若者や定年後に社会貢献しながら働きたい人と共に汗を流しながら、人生を切り開いていきたい。僕自身は 40代も激動でしたが、50代になった今も、少年のごとく果敢に挑戦し続けたいと思っています。」

By 滝岡幸子